夏秋ピーマンにおける有望品種の検討

農業研究部

１．研究の背景

県内の夏秋ピーマンは施設栽培を中心に「さらら」（日本園研）が主力品種として長年栽培されてきた。しかし、障害果である尻腐れ果の発生が多く問題となっている。そこで、収量、品質、果皮色が「さらら」と同程度で、尻腐れ果が少ない品種の選定を目的に「さらら」、「福緑」（宝種苗）、「UN-607」（横浜植木）の３品種で比較試験を行った。

２．研究成果の内容・普及のポイント

・商品果収量は「福緑」、「UN-607」ともに「さらら」と同程度であったが、「福緑」はＡ品率が低かった（表１）。
・尻腐れ果は「福緑」、「UN-607」ともに「さらら」よりも発生率、発生果数が約7割減少し、発生果数は全栽培期間を通じて「さらら」より少なかった（表１、図１）。
・果皮色は「UN-607」が「さらら」と近い色であったが、「福緑」は色が薄かった(図２)。
・尻腐れ果の発生が少なく、果色が「さらら」に近い「UN-607」が有望品種である。

表１　収量と品質

品種	商品果収量 (kg/a)	商品果数 (個/a)	A品率 (%)	尻腐れ果率 (%)	尻腐れ果数 (個/a)
さらら	922	28448	58	4.6	1485
福緑	976	28279	51	1.5	448
UN-607	986	29436	61	1.1	358

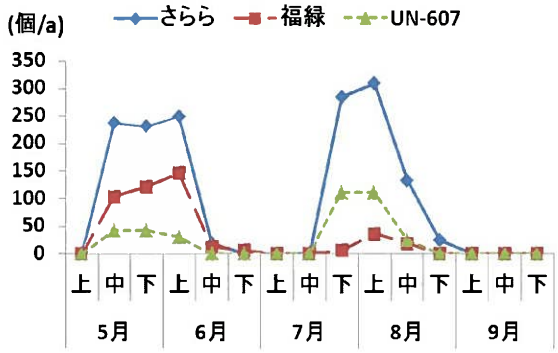

図１　月別の尻腐れ果発生推移

図２　品種別の果皮色

３．期待される効果

尻腐れ果の減少による商品果収量の増加と、農家所得の向上が期待できる。

４．担当機関連絡先

農業研究部　果菜類チーム
TEL：０９７４－２８－２０８１
住所：豊後大野市三重町赤嶺２３２８－８